

【論文】

戦時中家庭雑誌の用語の特徴  
—現代語への移行過程の例証として—

遠 藤 織 枝

Special Features of the Family Magazine (Ie no Hikari) in wartime  
— Some examples of the Changes into Contemporary Usage —

ENDO, Orie

要旨：戦時中の家庭雑誌『家の光』の用語を研究しているが、今回は今から70年前の日本語として、現代語とは異なる様相をしている部分に焦点を当てている。現代語へ移行する過程として捉えることで、現代語のありようも改めて確認できる。

キーワード：ウ音便形，るる→れる，タリ活用形容動詞，  
「やる」と「あげる」，戦時中雑誌の日本語

はじめに

本紀要20-1号で、「戦時中の敬語—家庭雑誌『家の光』のグラビアから—」と題して、雑誌『家の光』の戦時中のグラビアページのことばを調査した中の皇室関係の敬語について報告した。また遠藤（2006）では、当雑誌の描く女性像について論じ、遠藤（2007）では、当雑誌の外来語について論じている。本稿では同じ雑誌から作成した言語コーパス（以下「雑誌コーパス」と呼ぶことがある）に基づいて、現代語への移行の過程にある語法に焦点を当てて論じる。

このような研究の意義、『家の光』を調査研究対象とする理由、調査対象の範囲、調査の方法などについては、本紀要20-1号に述べているので、本稿では割愛する。

## 1. ウ音便使用にみる文語的表現から現代語への推移

1931年当時の雑誌記事の中には、以下の例に示すように、ハ行四段動詞が促音便ではなく、ウ音便の形を取っている例が見られる。なお例文末の(1931/4)などの数字は掲載年月を示している。

例1 首から生えてゐる羽が体を覆ふて<sup>1)</sup> まるで木の葉のやうに見えます。(1931/4)

例2 婦人運動の大立者として、最も人気を担ふてゐる吉岡弥生女史の…(1931/6)

の「覆ふて」「担ふて」で、現代語形では「覆う＝覆って」「担う＝担って」と促音便化しているものである。この種の動詞の用法は例に挙げた2語の他に、「憩ふて・追うて・負うて・被うて・背負ふて・戦ふて・給うて・(相)集ふて・払ふて」の9語がみられる。(「ふ」と「う」の表記は、雑誌記載のまま)

当時の文法書をみると、日本文学講座刊行会による『文法及び口語法』では、「促音便に関東と関西では多少のちがひがある」として、「買うた貰うた 揃うた」のようなウ音便の例が挙げられている。(p116)

また、佐久間鼎(1935)では、「促音便」の項で

a ユー (言) ・ ・ ・ ・ ・ イツ  $\begin{matrix} \nearrow \text{テ} \\ \searrow \text{タ、タラ} \end{matrix}$

---

1) ウ音便であるから、「覆うて」と表記すべきところ、ハ行四段の終止形の「覆ふ」と混同されている。例2の「担ふて」も同様。

b タツ（立）・・・タツ  $\begin{cases} \text{テ} \\ \text{タ、タラ} \end{cases}$

c ツル（釣）・・・ツツ  $\begin{cases} \text{テ} \\ \text{タ、タラ} \end{cases}$

aの類には＜スウ（吸）・クー（食）・アウ（合・逢）・カウ（買・飼）・ヨウ（酔）・オモウ（思）＞などがあるし〔……〕aの類の動詞は「買ふ」「合ふ」「思ふ」「祝ふ」などで、東京語ならびに関東方言の流儀としてかならず＜カウ・アウ・オモウ・イワウ＞のやうに語尾に「ウ」を発音します。関西方言では一般に長母音になつて、それぞれ＜コー・オー・オモー・イオー＞のやうになるやうです。で、この種の動詞に「て」や「た・たら」がついた場合にも、＜コーテ・コータ＞などのやうになります。これがいはゆるウ音便で、普通の仮名遣いでは「う」を書いて、「かうて・あうた」などのやうにします。

〔……〕「沿ふ」「問ふ」「乞ふ」などは、同類の動詞ですが、＜ソツテ・トツタ・コツタラ＞（ママ）といふと、他の動詞とまぎれます。「反る」「取る」「凝る」など。さういふ動詞の使用は、関東方言では一般に避けられてゐます。かういふ風にまぎれる動詞を使用することが自然に避けられる傾向は、やはり一般的なのでして、言語心理学上注意すべきものだといふことを別の機会に説きたいと思ひます。（p207）

と述べている。

さらに、『日本語百科大事典』中「日本語の歴史」（築島裕 執筆）、「6. 明治・大正・昭和」、c. 昭和（2）昭和前期（昭和初年－昭和20年8月15日まで）の項では、以下のように述べられる。

### 1) 文語的表現の残存

…ハ行四段に活用していた動詞は、明治期以降は促音便になるのが普通であるが、昭和前期までは、特定の語の場合、ウ音便で用いられ

ることが多かった。もっともよくみられるのが「沿うて」である。[例文省略]

作品によっては「沿ふ」は「沿って」の形で使われ他の語がウ音便になっていることもある。[例文省略] (p108)

これら文法書・事典に記されたことを参照しながら、当時の雑誌の言語のウ音便使用の実態をみていきたい。ウ音便形が現代語の促音便に変化したあとの残存物ということは、当然のことながら現代語化した語形がより多く使われているはずで、これらウ音便の用法の語として収集した「憩ふ・追ふ・負ふ・覆ふ・被ふ・背負ふ・戦ふ・給う・集ふ・担ふ・払う」の11語について、その促音便の用法を見ることにする。

①「憩ふ」は次の例3のウ音便の1例。

例3 椰子の樹蔭で視察団の一行の憩ふてゐる所。(1931/2)

②「追ふ」は、ウ音便のものは以下の例4の1例。

例4 年を追うて明朗満州国が完成されて行くにつけ、(1938/11)

促音便の例は例5など9例。

例5 驚いて飛び立つ鴨を追つて手網をかぶせる。(1940/4)

③「負ふ」は、ウ音便のものが次の1例。

例6 雲を負うて地平線の上に抜け出た黒き姿！(1935/5)

促音便のものも例7に示す1例。

例7 名誉の戦傷を負つた白衣の傷痕軍人たちは(1938/10)

④「覆ふ」は例2の「覆ふて」のほかに「鬼瓦を覆うて」(1933/4)、のウ音便の例があるが、促音便の例はない。

⑤「被ふ」はウ音便の1例。

例8 拳国面を被うてひとたびは哭き。(1945/1)

⑥「背負ふ」は、ウ音便は以下の1例。

例9 苦しい経営を背負ふて一生を終つた亡き夫君荒太氏の…(1931/6)

促音便のものは例10など17例。

例10 内外多難の中華民國を背負つて立つ問題の蒋介石。(1933/1)

⑦「戦ふ」は、ウ音便では、

例11 国家の為に戦ふて廃兵になつたものへ… (1931/9)

の1例、促音便では例12など5例。

例12 フーバアと戦つて見事栄冠を勝ち得たる米国新大統領… (1933/1)

⑧「給ふ」は補助動詞の用法で、

例13 これは天照大神が、……天の岩屋に隠れさせ給うた御時、(1940/3)  
など、ウ音便の例が7例あり、また、例14のように促音便の例も1例ある。

例14 この御写真は……宮内省より御貸下げ給つたものであります。  
(1935/2)

なお、『新選国語辞典8版』では動詞の活用形と音便形を各動詞の見出し語の後に示しているが、「給う」の活用を示す欄では、促音便形は示されていない。つまり、当辞書では「給って」の語形は認められていない。例14は極めて珍しい使い方と言える。この語は『三省堂現代新国語辞典2版』（以下『三現国』）『明鏡国語辞典』（以下『明鏡』）などに、「古い言い方」である旨の注記がされている。古語形のまま現代に伝わってきていると考えられる。

⑨「集ふ」は、

例15 八千名の全国産業組合関係者が相集ふて盛大に行はれました。  
(1931/7)

のウ音便の1例のみで、促音便の用例はない。

⑩「担ふ」はウ音便の例は、例2の「担ふて」の他に、「重責を担うて」(1940/12)の例がある。促音便の例では例16など15例。

例16 われらの輿望を担つて太平洋を守る、永野連合艦隊司令長官の英姿… (1937/5)

⑪「払ふ」は、ウ音便の例は、

例17 たゞどうすれば日光を採り入れられるかに苦心を払ふてゐます。  
(1931/8)

の1例、促音便の例は2例で、

例18 村から町から出た数多き肉親同胞が尊い犠牲を払つてゐるのだ。

(1938/1)

と「鞘を払つた白刃一閃」(1941/6)がある。

以上の11語のウ音便の使用例の合計は19例、促音便の合計は50例である。ウ音便の使用例は、「給ふ」「被ふ」以外は1930年代初めに集中していて、その後の使用は減っている。「被うて」は1945年1月の雑誌に使われていたが、それは文語が好まれる詩の中での使用である。したがって、「給うて」以外での促音便化が進んでいることが明らかである。

雑誌グラビアの用語は、戦争末期にかけて、激越な調子の文章・語彙が目立ってくる。このことと、雑誌グラビアに使用される語の範囲内での考察だが、ウ音便と比べて、より語調がはっきりして強く表現できる促音便が好まれることとは連動していると思われる。

なお、「問う」「乞う」「請う」「訪う」など、現代語でも促音便化しない語もあり、それらが上述の佐久間の述べるような、「取る」「凝る」の促音便との衝突を避けるためであるのか否かは改めて検討する必要がある。

## 2. 動詞・助動詞の語末「るる・るゝ」から「れる」へ

1930年代の雑誌の文章には「運用さるゝ装置」(1931/2)「陽光にゆるゝ、たくましい竹の密林」(1935/6)のように、現代語助動詞・動詞では「れる」に変化したものが、古語の助動詞や、ラ行下二段の古語形のまま使われている例がある。この種の「るる・るゝ」→「れる」の推移をたどる。なお、当時の雑誌では同音の連続の際は繰り返し符号を用いることが多いが、時には同じ仮名が繰り返して使われるため、「るる・るゝ」と表記する。

「るる・るゝ」は、助動詞と、動詞の語末とに現れるが、品詞別、接続別に例を分けて示す。

## 2-1 受身・可能・尊敬の助動詞「る」「らる」の連体形

### a 四段動詞+「る」

例19 御召艦浅間<sup>2)</sup>に於て東郷司令長官の奏上を聞召さる、光景。

(1933/11)

のような語形で、ここで使われる「る、」は、尊敬の助動詞である。ほかには、「遊ばす→御搭載遊ばさる、：売り捌く→売り捌かる、：召す→召さる、：呼ぶ→呼ばるる」の使用例がある。

### b サ変動詞・上一段動詞+「らる」の連体形

例20 武者押の勇壮さは、相馬の野馬追祭、春日若宮祭等に比せらる、

戦時を彩る一大行事であつた。(1942/6)

のようなもので、ここの「る、」は受身の助動詞である。ほかには「見る→見らる、・運用す→運用さる、・安置す→安置さる、×2・す→さる、<sup>2)</sup>」があった。(×の後の数字は出現度数を表す。以下同様)

## 2-2 ラ行下二段動詞の連体形

例21 歡喜あふる、この土を しつかとわれら踏みしめて……(1940/3)

のようなもので、ほかに「溢る→溢る、×7・荒る→荒る、崩る→崩る、・晴る→晴る、洩る→洩る、：流る→流る、：分(か)る→分るる」がある。

合わせて助動詞の連体形11例、動詞の連体形16例が収集できている。中でも「あふる」の連体形「あふる、／溢る、」が7例と、際だっている。これらは、現代語の助動詞「れる」「られる」、ラ行下一段活用動詞「溢れる・荒れる・崩れる・晴れる・洩れる・流れる・分かれる」の古語形で、文語表現の残存である。「崩る、・洩る、」は俳句の中での使用で、「流る、」は劇の題名の中で使われていた。俳句や題名では古語が用いられやすいので、これらの語が選ばれたのであろう。

一方、同じ助動詞・動詞でも「召される・見られる・溢れる・流れる」など、

---

2)「運用す・安置す・す」は、サ変動詞だから「運用せらる、・安置せらる、・せらる、」となるところ。

現代語形と同じ「れる」の形で使われている例も多い。古語形から現代語形への推移の過程にあり、古語形から現代語形への流れのただ中であって、現代語形へのシフトの状況がみられるのである。そのシフトの仕方を以下に観察していく。

## 2-3 「れる」

### a 助動詞

1930年代すでに、一般に現代語が浸透していた時期であるから、助動詞も「活躍される（1931/1）、算えられる（1931/5）、行はれる（1931/7）」など、ほとんどは「れる」「られる」になっている。

### b ラ行下一段動詞

ほとんどが、「垂れる（1931/1）、現れる（1931/4）、崩れる（1931/5）」など、下一段活用のものであって、下二段活用のものはごくわずかである。

先に「るる・るゝ」の例として挙げた動詞で下一段活用の現代語形のもと、古語形のもの进行比较してみる。

#### ア「溢るる」と「溢れる」

「溢るる」は例21で示したもののほか「歓喜に溢る、帝都の南京（ナンキン）陥落祝賀の催し」（1938/2）、「赤誠溢るる奉祝絵巻」（1940/4）のように漢語の多い文中で、また「赤誠・奉祝」など硬質な語とともに使われている。「溢るる」の使用例は7例である。

「溢れる」は連体形では「顔面にあふれる大和魂」（1939/3）と、「一家団欒の食卓に溢れるほど」（1940/8）の2例だが、「盛夏の活花として涼味の溢れたものです」（1932/8）、「戦地の兄へ書く便りも喜びに溢れてゐます」（1943/9）などその他の語形の使用が15例あり、そこでは「～ものです・喜び・兄」のような平易な日常語が使われる文章の中で使われている。

#### イ「流るる」と「流れる」

「流るゝ」の例は1例で、『乳と蜜の流るゝ郷』（1935/5）と、劇の題名の中で使われている。「流れる」は

例21 羽越線の新津と、水原駅の間を流れる阿賀野川に架つている鉄橋



です（1933/1）

と、話しことば的な「です」体の文章の中で使われており、このほかに、6例みられる。

ウ「崩るゝ」と「崩れる」

「崩るゝ」は

例22 水中に牡丹崩るゝ金魚かな（1933/8）

の俳句の中の用法である。「崩れる」は以下のように使われる。

例23 ナイアガラ瀑布崩れる：上下共に崩れた後の光景。（1931/5）

エ「呼ばるゝ」と「呼ばれる」

「呼ばるゝ」は、

例24 世界に第一と呼ばるる火山大阿蘇の 火口丘への登山口。（1935/7）

「呼ばれる」は

例25 北米ウイスコンシン山脈中の「魔の岩」と呼ばれる不思議な形の  
岩です（1931/10）

のように使われている。

いずれも、「るゝ」のものが文語的な文章の中で使われ、「れる」のものが平易な日常語の中で使われて、その文体の違いが明らかである。戦時中の雑誌の古語形と動詞・助動詞の現代語形の文体による使い分けの実情がわかる。文語的文章の減少とともに、動詞・助動詞の古語形が減っていき、現代語形の使用が増えていくのである。

### 3. 「タリ」活用の形容動詞の使用状況

上述の「日本語の歴史」の昭和前期の記述の中に、「昭和前期」にみられる文語的な言い回しとして「蒼茫たる平原」の例が挙げられている。漢語由来のタリ活用の形容動詞である。

湯沢（1951）でも、

口語文や講演には「盛んなる歓迎」「堂々たる態度」のような言葉

が用いられることがある。……「堂々たる」は文語の形容動詞「堂々タリ」の連体形であるが、口語の形容動詞にはこれに当るものがない。「堂々たる」に当る口語は「堂々としている」「堂々とした」である。（「堂々と」は副詞）。（p192-193）

と述べられ、

朗々たる（朗々トシテイル、…トシタ）茫然たる（茫然トシテイル、…トシタ）

決然たる 断然たる 呆然たる 赫々たる 滔々たる 悠々たる  
坦々たる 淡々たる 紛々たる

の例が挙げられている（p193）。本稿では、雑誌コーパスで、この「タリ」活用の形容動詞がどのような使用状況にあったか、また、『毎日新聞CD-ROM』（以下『毎日CD』と略記）により、現代語ではどう使用されているかを調べてみた。

漢語由来の形容動詞の連体形「～たる」の用法のものを検索すると、「隠然たる・皚々たる」以下の38種、102語が収集できた。まずこの38語を一覧表にし、「タル」とそれ以外の語形で使用されるものがあればその数を記入する。次にこの種の語が当時の辞書で採録されているか、文法的にどう扱われているかを、当時の辞書『明解国語辞典』（1943金田一京助編復刻版1997、『明解』と略記）と『大言海』（『新訂版』1956）で調べて、表に書き加える。また、現代語の辞書の採録状況と文法事項を示すために『明鏡』の扱いを記入した。雑誌掲載の語の表記は「潑潑・潑刺」「縹渺・縹緲」など複数のものもあるが、ここでは同一語としてまとめている。

「たる」を共通の語形として検索した結果、集まった38語だが、辞書にもほとんどが採録されていて、当時の雑誌で使われた形容動詞の語群のサンプルとみてもあながち的外れでもなさそうである。

ここに示した語は残存とされる「タル」形で使用されていたものであるが、それらも、現代語形とされる「ート」形でも使われているものもあり、「たる」から「と・とした」への移行の過程として捉えることができる。

戦時中家庭雑誌の用語の特徴—現代語への移行過程の例証として—

|       | 一タル | 一ノ | 一ト | その他      | 『明解』 | 『大言海』 | 『明鏡』    |
|-------|-----|----|----|----------|------|-------|---------|
| 隠然    | 1   |    |    |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 皚々    | 3   |    |    |          | 副    | 副     | 不収録     |
| 峨々    | 1   |    |    |          | 名・副  | 不採録   | 形動トタル   |
| 赫々    | 10  | 5  | 1  |          | 副    | 副     | 形動トタル   |
| 確固    | 1   |    |    |          | 名    | 不採録   | 形動トタル   |
| かくしやく | 2   |    |    |          | 名    | 名     | 形動トタル   |
| 冠     | 1   |    |    |          | 名    | 名     | 形動トタル   |
| 巖     | 1   |    | 4  |          | 名・副  | 名     | 形動トタル   |
| 巖然    | 1   |    | 3  |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 絢爛    | 3   |    |    |          | 名    | 名     | 形動トタル   |
| 轟然    | 1   |    | 1  |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 荒漠    | 1   |    |    |          | 不収録  | 不採録   | 不採録     |
| 広漠    | 3   |    |    |          | 名    | 名     | 形動トタル   |
| 広茫    | 1   |    |    |          | 不収録  | 不採録   | 不採録     |
| 荒涼    | 2   |    |    | 荒涼1 荒涼さ1 | 名    | 名     | 形動トタル   |
| 混沌    | 1   |    |    |          | 名    | 名     | 形動トタル   |
| 颯爽    | 6   | 1  | 10 |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 燦々    | 1   |    | 2  |          | 副    | 副     | 形動トタル   |
| 燦然    | 2   |    | 5  |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 燦     | 4   |    | 4  |          | 名    | 不採録   | 形動トタル   |
| 燦爛    | 1   | 1  |    |          | 不収録  | 副     | 形動トタル   |
| 綽々    | 3   |    |    | 綽々1      | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 肅然    | 1   |    |    |          | 副    | 副     | 形動トタル   |
| 整然    | 1   |    | 1  |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 自若    | 1   | 1  |    |          | 名    | 副     | 形動トタル   |
| 断乎    | 1   |    | 1  | 断乎1      | 名・副  | 副     | 副・形動トタル |
| 重畳    | 1   |    |    |          | 名    | 名     | 名・形動トタル |
| 堂々    | 19  | 5  | 12 | 堂々30     | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 覇     | 1   |    |    |          | 名    | 名     | 名       |
| 潑刺    | 3   |    | 4  | 潑刺さ1     | 名    | 副     | 形動トタル   |
| 縹緲    | 3   |    |    |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 満々    | 3   |    |    |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 悠久    | 1   |    |    | 悠久2 悠久な1 | 名    | 名     | 名・形動    |
| 洋々    | 3   |    | 1  |          | 副    | 副     | 形動トタル   |
| 嚟嚟    | 3   |    | 2  |          | 副    | 副     | 形動トタル   |
| 烈々    | 10  |    | 1  |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |
| 朗々    | 1   |    |    |          | 名・副  | 副     | 形動トタル   |

採集した語の中で「堂々」が最も多く使われていたが、「北海洋上を堂々進撃するわが艦隊の精鋭」(1942/8)や、「各選手は隊伍を組んで堂々式場へ」

(1942/9) のような、単独の用法のものが最も多かった。「タル」形の使用例が多いのは「烈々・颯爽・赫々」で、これらの語が文語的文章の中で使われやすい語であったとも言えよう。とはいうものの、「タル」形は現代語からすっかり消えたわけではない。改まった硬質の文章、古風な雰囲気を残す文脈、確固として明言したい場面、などでは、まだまだ必要とされている。ここで、現在の新聞の中での使われ方を、『毎日CD』で検索しながら観察してみる。雑誌コーパスの38語をそのまま使うが、『毎日CD』で1例も採集できない語は除外した。

|       | ータル | ート  | ーノ | ーナ | その他               |
|-------|-----|-----|----|----|-------------------|
| 隠然    | 1   | 2   |    |    |                   |
| 峨々    | 1   | 0   |    |    |                   |
| 赫々    | 1   | 0   |    |    |                   |
| 確固    | 29  | 17  |    |    |                   |
| かくしやく |     | 1   |    |    |                   |
| 冠     | 12  | 0   |    |    |                   |
| 巖然    | 7   | 14  |    |    |                   |
| 絢爛    | 2   | 1   | 2  | 3  |                   |
| 轟然    | 0   | 1   |    |    |                   |
| 荒漠    | 0   | 1   |    |    |                   |
| 荒涼    | 1   | 8   |    |    | 荒涼1 荒涼さ1          |
| 混沌    | 1   | 7   | 9  |    | 4 ーが1 ーを ーに1      |
| 颯爽    | 1   | 4   |    |    |                   |
| 燦然    | 0   | 2   |    |    |                   |
| 綽々    | 0   | 1   |    |    |                   |
| 肅然    | 0   | 4   |    |    |                   |
| 整然    | 0   | 52  |    |    |                   |
| 自若    | 0   | 3   |    |    |                   |
| 重畳    | 0   | 0   |    |    | 一的7               |
| 堂々    | 21  | 214 | 24 |    | 堂々21              |
| 澆洩    | 1   | 2   |    |    |                   |
| 満々    | 0   | 1   | 11 |    | ーだ29・ーで7・ーに6・満々26 |
| 悠久    | 0   | 1   | 17 | 1  | ーより1              |
| 洋々    | 0   | 0   | 1  |    | ーだ1               |
| 烈々    | 1   |     |    |    |                   |
| 朗々    | 1   | 4   |    |    |                   |

この表で除外したのは、戦時中の雑誌で使われていて、最近の新聞では使われていない語、「皚々・巖・広漠・広茫・燦々・燦・縹渺・嚟唳・霸・断乎」の10語である。

38語中の10語（26.3%）が使われなくなっている。また、戦時中によく使われたが、最近ではあまり使われない語として「赫々・烈々」があるが、これら雑誌コーパスにはよく出てくるが、新聞ではあまり使われない語の、雑誌上での使われ方をみておく。

例26 見よ赫々たる緒戦の大戦果！（1942/2）

例27 強烈な南海の光のもと、大島島に燦として翻る帝国軍艦旗。（1942/3）

例28 世界に覇たる日本の。（1932/10）

例29 烈々相打つ熱闘——かくして世界にほこる『皇軍魂』は養はれて行きます。（1941/6）

戦時中雑誌の特徴をよく表していて、戦闘・戦勝・戦意高揚に関する報道の文章に使われている。一方で、このような語は平時の新聞では全くと言っていいほど、見られない。使用される語の選択は、社会の状況、人々の生活や、価値観の変化などと密接な関係がある。特に国を挙げて必死の戦いを遂行している社会で選ばれる語は、平時に使われる語とは質的に違うことがわかる。今回調査している雑誌と新聞の形容動詞の使用の差は、戦時中の用語と平和な社会での用語の差と考えることもできよう。戦争の勝利をめざし、戦意を高揚し、国民を鼓舞するために、激越なプロパガンダが行われていて、そのために選ばれた形容動詞のいくつかは、戦後の平和な社会では不要になって使われなくなったとみることもできるのである。

次に雑誌コーパスでも、『毎日CD』でも、使用頻度の高い語について、使用されている語形を比較してみる。

ア「堂々」

雑誌コーパス：堂々30・堂々たる19・堂々と12・堂々の5

毎日CD：堂々と214・堂々の24・堂々たる21・堂々21

戦時中・最近とで、いずれも、同じ形の用法がみられるが、量的な相異

として、戦時中では「堂々・堂々たる」が多かったのに対して、最近の新聞では「堂々と」が圧倒的に多いことがわかる。「堂々と」の中でも、最近の用法で多いのは「堂々とした」の語形で、28例みられた。この用法は連体修飾の機能としては「堂々たる」と同じものである。この語形は戦時中は全く見られない。戦時中は連体用法は「堂々たる」だけであったのが、戦後は連体用法としての「堂々たる」が減って「堂々とした」が増えてきていることがわかる。

イ「颯爽」

雑誌コーパス

例30 颯爽と勤労奉仕に出動。(1942/2)

例31 銃取る手を鎌に、気合をかけて、颯爽たる鎌さばき。(1942/11)

毎日CD

例32 史上最年少で首相の座についた颯爽たる姿と……(2005/12)

例33 戦後歌壇に颯爽と登場。(2005/6)

同じように使われているが、量的に戦時中は「颯爽と6・颯爽たる10」に対して、新聞では「颯爽と4・颯爽たる1」と、「たる」優勢から「と」優勢へと変わってきている。

ウ「整然」

雑誌コーパスではそれほど多く使われていなくて、新聞で多く使われている語である。新聞の例はすべて「整然と」であり、「タル」形は全くない。

例34 暴力的な活動ではなく整然と行われた。(2005/4)

連体用法は

例35 整然とした中に線質の重厚さと味わいを加え……(2005/7)

のように使われ、「タル」形の補完をしていると考えられる。つまり、雑誌の時代では「タル」形が優勢であったのが「ト」形「トシテ／タ」形へと移行しているのである。

エ「冠たる」

この語は『毎日CD』でも

例36 世界に冠たるメーカーは多いのに、世界に冠たる銀行はない。  
(2005/2)

のような、「タル」形のものしか使われていない。現在刊行されている辞書で、品詞表示と使用の実際との関連を見ておく。『明鏡』は「冠」の項目の中で、②形容動詞としてトタルと記している。このことは「冠たる」と「冠と」という語形が存在すると考えていることを意味している。一方、『三現国』は「冠たる」で立項して品詞を「連体詞」としている。実際に使われる語形が「冠たる」しかないことを考えれば、この辞書の扱いのほう実情に即しており、適切だといえよう。

オ「厳然」

この語は、

例37 高齢の議員が厳然たる力を持っているようなときに…… (2005/12)  
の「タル」形と、

例38 分業によって厳然とした格付けができています。(2005/12)  
のような「ト」形と両方が使われている。量的には「タル」形7例に対して、「ト」形14例で「ト」形の方が優勢である。

カ「満々」

この語の用法は、戦時中とはかなり変化してきている。戦時中の雑誌では

例39 満々たるメコン河を渡つて行軍する進駐部隊。(1941/10)  
のように「タル」形のものだけ4例使われ、水が満ちあふれるという本来の意で使われているが、最近の新聞の「満々」は、「意欲満々・やる気満々」のように複合語として使われ、「満々」の内容も気分や雰囲気に変わってきている。「満々」を含む語が81語収集できたが、そのほとんどが「意欲満々29例・自信満々26例・やる気満々9例・闘志満々9例」など複合して使われている。液体が満ちる意味のものは、

例40 用水路には水が満々と流れ、昔と比べて水管理が数段容易になった…… (2005/7)

の1例しかなかった。

また、語形としては、雑誌コーパスでは「満々たる」の「タル」形のみであったが、『毎日CD』では

例41 「だからうちは通るよ」と自信満々。(2005/9)

例42 「アメリカ勢を負かしたい」と意欲満々だ。(2005/2)

例43 「可能性は無限だ」と自信満々に言った。(2005/11)

のように、形容動詞の活用形が示すさまざまな語形で使われている。

#### 4. 「やる・一てやる」と「あげる・一てあげる」

恩恵を与えたり、品物を与えたりすることを表現する動詞・補助動詞の「やる・一てやる」が、昨今では「あげる・一てあげる」に座を譲った感があるが、戦時中の雑誌の実情を見ておく。

##### 4-1 「やる」

例44 汽車や電車の中で子供に乳をやる所を見せないやうにすること。  
(1931/10)

例45 砂漠の船と呼ばれる駱駝の児に好物の芋をやる子供達。(1933/4)

例46 朝はやく、小山羊に草をやる父と子のうへに、やはらかな日差が  
ふりそゞぐ。(1939/10)

例47 これは日本襟だから、お乳をやるにも便利。(1941/3)

「お乳をやる・草をやる・芋をやる」の例が収集できたが、同じ対象で「お乳をあげる・草をあげる」のように品物を与える言い方の「あげる」「与える」の使用例は1例もない。

##### 4-2 「一てやる」

例48 綻びを繕つてやる (1931/4)

例49 籠の中へ入れてやる (1932/2)

例50 茂雄のものを買つてやりたい (1935/11)

例51 抱きしめてやりたくなります。(1938/11)

など9例あったが、これに対応する「一てあげる」の例は1例もない。70



年の間の大きな変化と言える。

現代では「花に水をあげる」「子どもにご飯をつくってあげる」などは、本来謙譲語である「あげる」を花や子どものような話し手の下位に位置する対象に対する動作に使うのは間違いだ、不自然だなどと、言われながらも、一方で「やる」は下品だから避けたい、ぞんざいな言い方だから丁寧に言いたい、などの理由で「あげる」を使う人が多くなっている。

文化審議会国語分科会が2007年2月に答申した「敬語の指針」でも、「植木に水をやる」というか「植木に水をあげる」というか、を問題として取り上げている。そこでは、

「やる」を適切な言葉として選ぶ人は、「あげる」に謙譲語的な旧来の意味を認め、「植木」はその種の言葉を用いるべき対象物ではないと考えている可能性がある。一方、「あげる」を使うと答える人は、この語の謙譲語的な意味が既に薄れていると考え、同時に「やる」という語に卑俗さ・ぞんざいさを感じてこれを避けている可能性がある。[……]「植木に水をあげる」という場合の「あげる」は旧来の規範からすれば誤用とされるものであるが、この語の謙譲語から美化語に向かう意味的な変化は既に進行し、定着しつつあると言ってよい。(p7)と述べている。

このように、昨今では美化語とされるように変化した「あげる」が戦時中は全く使われていなかった事実も判明した。それは本来の謙譲語としての用法が雑誌記事の中に必要とされなかったからであろうし、また、美化語化する要因がまだなかったからであろう。逆に言えば、与える意味を表すには「やる」を使うのが当然であり、卑俗だとかぞんざいだとは全く考えられていなかったということでもある。ここに、「やる」と「あげる」の捉え方が70年前と今とでは大きく変わってきたことを知るのである。

## おわりに

以上、戦時中の雑誌のコーパスから、現代語の用法とは異なるものをいくつか取り上げて、文語の名残りであり現代語への過程にあること、またそれらが現代語形成にどのように関わっているかを考察してきた。現代日本語の70年前の実情の片鱗を垣間見ることが出来たし、また、現在の日本語がいかにして、現在の姿になったかをたどることもできた。

戦時中の雑誌の日本語の用法で現代語と異なる点として、「震撼せしめた」などの使役の用法、感ずる・感じるなどのズル・ジルの消長、「新しき・美しき」などの形容詞の古語の使用、「ロサンゼルスに開かれた」などの「に」の用法など、考察すべき項目はまだ多く残されている。それらの歴史性を解明することが次の課題である。また、戦時中の雑誌として、その時期特有の語彙・用法についても順次解明していきたいと考えている。

## 参考・引用文献

岩井良雄（1948）『新標準語法』山海堂

遠藤織枝ほか（2004）『戦時中の話しことば—ラジオドラマ台本から』ひつじ書房

遠藤織枝（2006a）「戦時中の敬語—家庭雑誌『家の光』のグラビアから—」『文学部紀要』20-1号文教大学文学部2006

遠藤織枝（2006b）「戦時中家庭雑誌の描く女性像」『ことば』27号現代日本語研究会

遠藤織枝（2007）「戦時中家庭雑誌の外来語」『北京大学・文教大学日本語教育実習15周年記念シンポジウム論集』（印刷中）

金田一春彦他編（1988）『日本語百科大事典』大修館書店

国文学講座刊行会（1935）『文法及口語法』日本文学社

佐久間鼎（1936）『現代日本語の表現と語法』厚生閣

鈴木一彦（1990）『日本語をみつめた文法・現代語』東宛社

山口穂編（1987）『国文法講座5時代と文法』明治書院

湯沢幸吉郎（1952）『現代口語の実相』勉誠社1981復刻版

文化審議会国語分科会「敬語の指針（報告案）」

[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/bunkasingi/pdf/keigo\\_tousin.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/bunkasingi/pdf/keigo_tousin.pdf)

参照辞書・検索資料

『三省堂現代新国語辞典2版』三省堂2004

『集英社国語辞典第2版』集英社2000

『新選国語辞典第8版』小学館2002

『新訂大言海』1956 富山房

『新明解国語辞典第6版』三省堂2005

『明解国語辞典』（金田一京助編1943.復刻版1997三省堂

『明鏡国語辞典』大修館2002

『毎日新聞CD-ROM2005』日外アソシエーツ2006